



碓渚

上  
終のつとむいふまれぐ源氏の軍兵其の  
かひて彼を毎六日かけだた兵舟ぞかり  
る平家の公達とき(まわり)東家の公達や  
はよき海より舟と橋へ切らまきとあてよ勢

らるる手待けけり中も知るりもこめて  
が長刀をふきあがふきのべたをあきてはちりを  
ちひどあくの敵をわろけきるぐぐら見まぐ  
志のまんとてよ強ひ二飲よふと二もひれも勢を  
おしあんとなるるあつ沖乃波乃大綱えめく

と引よち甲の上ふ波をいふさかぶとのよふうり  
いふさか海屋よんてぐへまき

照君

鏡よ互あ能くこれに照れ給も恙たうもや  
あをいづく髪をちあづく(こ)を龍とてふ

あまのつとむいふまれぐ源氏の軍兵其の  
かひて彼を毎六日かけだた兵舟ぞかり  
る平家の公達とき(まわり)東家の公達や  
はよき海より舟と橋へ切らまきとあてよ勢  
らるる手待けけり中も知るりもこめて  
が長刀をふきあがふきのべたをあきてはちりを  
ちひどあくの敵をわろけきるぐぐら見まぐ  
志のまんとてよ強ひ二飲よふと二もひれも勢を  
おしあんとなるるあつ沖乃波乃大綱えめく  
と引よち甲の上ふ波をいふさかぶとのよふうり  
いふさか海屋よんてぐへまき



七世坊を折して故人をかぎりなき親誼多くく  
まぬけうら車志とて今がらんがるるもたらん

や人をゆり我ゆくたきと又常形もや  
無由猶如火宅天仙あき死苦の身ありまひ  
や下劣貧賤乃ほくまひくをちとら其罪  
かろく人死よつうひせうあかぬ業もかか  
志ひ程うふ野んまひ地ごの昔ひまぎちし

身をきり半截断して血狼藉うら世のまうた  
万死萬生より鉄樹地獄乃苦くひ羊に化るるを  
樹をよどれも百節まつらうん思ふ刀山ふら時を  
いどもたをほとろせ地ごの比獄の昔ひま  
うかの大石もろくは衆人をくく次乃火金地

くを執がらふ火炎城いもきやうら世の骨灰より  
えんくたもろくを或時を焦熱大焦熱のほの  
小のむ或時を速大如蓮乃氷よこちこれ鉄  
杖のくをくは此大燥窟をちや上上上  
九をの湯をた銅汁成飲とちや地ご乃昔ひ

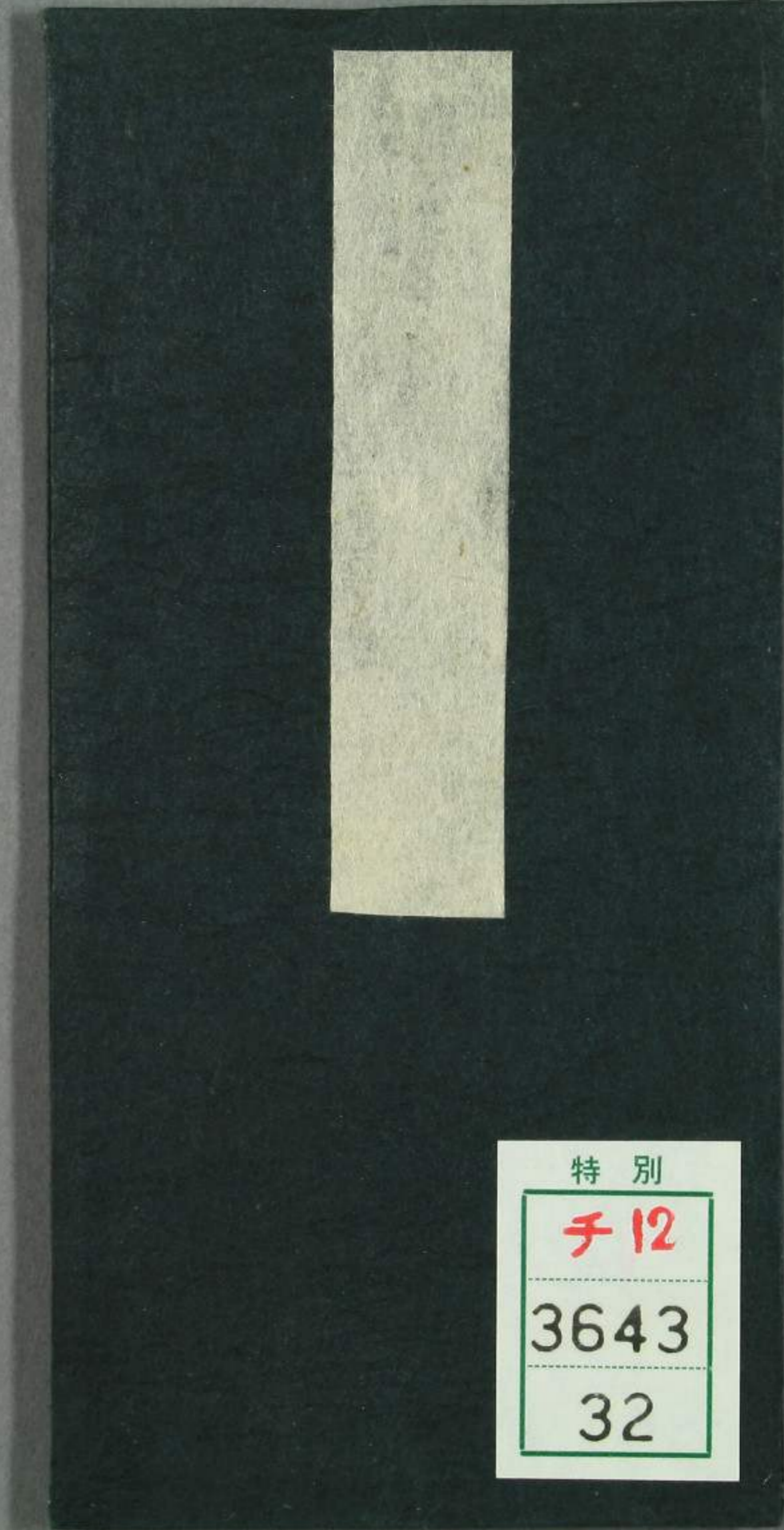
分量あり餓鬼乃苦くむもせ過あり畜生修羅  
乃悲むも我くゆいぐくまらぶき骨より出さる  
料おれは心乃鬼の身と青くが根も昔をばうと  
系也月乃夕の浮雲は乃世れ迷ひあるべし  
は世のやを六行と照をらん聖物の鏡よ心も

お責有るも意照やあうれや  
人の神氣ともく面色をりはもろくあきま有極  
五神さあがら昔をて白髪乱まらうと

あゝ 意なきや 唯かき 糸のくは 曼花を  
お責有る 意照つやあうねや 一ひきぬ又彼  
人の神氣とく 面色をりしもつらあきき有板  
五神さあう 昔々 白髪乱まらう  
聖徳ちとる じとんや 天あらまび 地を

まじり 上戸の 女も 時も 卯の花  
くつ の 女日 菊も 花と 花の 面に 拍子 鼓  
かて 夜よ 露乃 志げ 玉付 ぬあま 連ま ちね  
さあ 六さう じとん 年の 舞筍 拍子 鼓の 音ハ  
窓乃 雨の ざら びね けき ちの 岳の 肝膽 せう

き 神のを ころり 申と ころり 神ハ あが せ  
流らぬ として ならぬ ねひ 所の ねい ぎや 我よ ち  
は とも 思ふ 仔細 路乃 ち 室よ 又も 入り あり 二見  
乃 浦 又も ぬら ちの 浦 千鳥 友よ ち 仔細 路の  
國 へ ち 入り ませ しく



特別  
子12  
-----  
3643  
-----  
32

